
人事のシーズン

竹仲法順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人事のシーズン

【NZコード】

N3284D

【作者名】

竹仲法順

【あらすじ】

S県警捜査一課所属の大久保が、春の人事異動で所轄に飛ばされるという噂が流れ始めた。原因は捜査に関しての致命的な失態。同じく県警捜査一課所属の多嶋と原田もフロアー内で噂し始めるが……。

「おい、マジかよ?」

「何が?」

「うちの一課の大久保が所轄に飛ばされるつて」

「ああ、それね。県警の中じゅ知らないやついないよ」

「そう」

S県警捜査一課巡査部長の多嶋と、同じく巡査部長の原田がそう言つて、フロアでコーヒーを飲んでいた。

多嶋はさつき、近くのコンビニで起きた強盗事件の現場げんじょうに行き、凶悪な強盗犯一人を現行犯逮捕した。

そして無事取調べを終え、調書を書いて、上の人間に提出した。一仕事終えたばかりで疲れが出て、捜査一課フロア内でコーヒーを飲みながら、ゆっくりと寛いでいる。

原田はその間、課内で立ち上げていたパソコンを使って県警のデータベースに進入し、過去に起きた凶悪犯の特徴などを把握する作業を繰り返していた。

三月中旬で人事の季節だった。警察官けいさつかんにとっては、普通の人間よりも一月早い五月病が訪れる。

多嶋はコーヒーを啜りながら、

「大久保のやつ、へマやらかしたんだよ

と言つて、軽く笑つた。

「へマ?」

「ああ。実はな、お前も知つてるつて思うけど、例の阪洋銀行をターゲットにした連続銀行強盗のヤマで、大久保のバカ、ホシ取り逃がしたんだよ」

「あのヤマは県警の威信が懸かかつてたもんな。確か、銀行に侵入したホシが受付カウンターに指紋残してたよね?」

「そうだよ。それでその指紋を鑑識に回して、ホシが割り出され、

事件は無事解決つてところだつたんだ。それがあのザマさ。大久保が鑑識さんがせつかく採取した指紋を調査に回さなかつたから、事件は迷走する羽田になつたんだ

「そうか……」

原田が言葉尻に含みを残しながら、ゆっくりと頷く。

一転翻つた原田が、コーヒーをもう一口啜つて、

「確か、銀行強盗の主犯はあの羽野つて野郎だつたよな？」

と言つた。原田はすでに水面下で犯人グループの日星を付けているのだ。

「ああ。羽野悟朗。羽野が主犯で、自分の部下を巧妙に使って事件を引き起こした。手口は全部同じだ。最初、客の格好をして銀行内に進入し、大抵目立つ場所に座つている〇に銃を差し向けて人質に取る。そして銀行全体の電気を消させ、支店長を呼び出し、金庫に入つてゐる金全てを持つてこさせるんだ。それを盗んだホシがそのまま逃走」

多嶋がそう言い、軽く息をつく。

そして軽く一つ咳払いし、

「羽野のアジトは、すでにバレてる。県警の建物から県道三四五号線を、車で十五分ほど南下した場所にある。失態を犯した大久保を除く捜査員数名が張つてて、すぐに羽野を始めとする数人を逮捕するだらうな」

そう言い、カップに残つていたコーヒーを全部飲み干した。

多嶋も原田も、お互い疲れてゐるからか、ゆっくりと息を吐き出す。

「でも、大久保もバカだよな。何で鑑識の指紋採取係に指紋を採らせたのに、調査に回さなかつたんだろう？」

原田がそう言って、首を捻る。

多嶋が、

「実はな、羽野のグループは県内では知らない人間がいないマルBなんだよ」

と言つた。

「なるほどね。マル暴ですら怖がるマルBなら、捜査が行き詰まつたのも頷けるな」

原田がそう返し、皮肉がかつた調子で笑う。すると突然、予期せぬ無線が鳴り出した。

ピルルルル、ピルルルル……。

捜査一課フロアーに無線の音が木靈こだまする。

多嶋が仕方なさそうに立ち上がり、

「はい、S県警捜査一課多嶋」

と言つた。

あ、マサやんか？

「川崎警部補ですか？」

ああ。

無線先にいて、多嶋のことを名前の正人に託けてマサやんと仇名で呼んでいるのは、かにS県警一の鬼警部補かにの異名を取る川崎健次郎だった。

「何か？」

何かじゃないぞ。今、県道三四五号線全線に亘つて緊配掛けた。羽野たち銀行強盗の犯人グループが捕まるのも時間の問題だ。

「そうですか」

ああ。今から出動してくれないか？こいつには捜四のデカさんたちも来てる。大丈夫だよ。安心しろ。すでに犯行グループがいるビルは一重二重に包囲されてて、中の連中は袋のネズミだ。後は俺たちとマル暴さんたちで合同して突入するだけだ。一応念のため、ハジキ持つてきとけ。

「分かりました」

多嶋がそう返事すると、無線がガチャリと切れた。

子機を親機に掛けた多嶋が、原田と、同じく捜査一課フロアーにいた巡査の小林に、

「行くぞ」

と言つた。

ピー・ポー・ピー・ポー……。

すでに外には面パトが数台停まつてゐるらしく、派手なサイレン音が聞こえてきている。

春先だが、外は依然寒かつた。

多嶋も原田もコートを羽織り、小林は後ろにS県警の文字が入ったジャンパーを着て、フロアーを出る。

三人はエレベーターに乗り込んで階下へと降り、外に待機中だった面パトへに入る。運転席には小林が入り、助手席に多嶋、後部座席に原田が座つた。

三人とも川崎の命令通り、拳銃保管庫から各自の拳銃を取り出して携帯していた。弾は何かあつた場合を考え、フルに装填している。

数台の面パトが一気に現場へと走り出した。

冬の終わりで時折生温かい風も吹く。だが一瞬吹いた暖氣はすぐに冷たい風へと変わる。

パトカーが臨場するため、勢いよく走り始めた。

多嶋も原田も想いは一緒だつた。

“羽野を必ず捕まえてみせる”

パトカーが走つていく。窓外には田舎の街並みが望めた。S県は県庁所在地である市でも田園風景があるほどの田舎なのだ。

小林がパトカーの上に回転灯を点した。四台ほどのパトカーが一斉に緊走し出す。

多嶋たちはポケットの中に仕舞つたままのオートマを握り締めた。鉄材の持つ冷たい感触が手に移つては、掌を冷やす。

やがて警察の車両は現着し、多嶋たちは車を降りると、事実上の羽野の砦である事務所を包囲した。

臨場していた川崎が玄関まで行つて、コンコンと扉をノックし、

「S県警捜査一課の者ですが」

と言つと、中からすっかりうらびれた羽野が出てきた。

川崎が取得したばかりの真新しい逮捕状を提示し、羽野の手にガチャリとワッパを掛けて、乗ってきた車両へと誘導する。

こうして連續強盗事件を企てた悪の権化は捕まつた。

そして三月の下旬になり、人事が発表になる。

事前の予測通り、捜査に関して大失敗した大久保は、県内の所轄へと飛ばされた。

S県警の建物は人事異動が終わると、再び落ち着き始める。

春はすぐそこまで来ていた。連日温かい風が絶えず吹き、街は活気付く。

寒い季節が終わり、新しい季節が訪れた。それは厳しい季節を乗り越えた人たちに与えられる祝福に似たものだつた。

カレンダーが一枚捲られれば四月になつて、気温が着実に上がり出し、春爛漫だつた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3284d/>

人事のシーズン

2010年10月8日15時20分発行